日比谷復刻堂

雨ノ森　樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日比谷復刻堂

【Ｎコード】
Ｎ９４５４Ｓ

【作者名】
雨ノ森　樹

【あらすじ】
ここは日比谷復刻堂・・・現在と未来、そして過去の交差点。幻の交差点。この昼は喫茶店、夜はバーのありふれた小さく古ぼけた店。ほかと少し違うのは主人の輝には人の『探しもの』からその人を惹きつけ、夢や幻を見せる不思議な力があることだけ。ある客は笑い、またある客は泣き、あるものは覚悟を決めてこの店の扉を２回潜っていく。
今宵もまた来客があるようだ・・・。

ep. 01　25歳のスタンド・バイ・ミー

東京に来てもう7年目の春になる。
氷室雫は通い詰めた代わり映えのしない車窓に映る自分を見ながらふと思った。
こんな青い気持ちになると時々、３６５日でかけ、２４時間でかけ、６０分でかけようとすると決まって降りたくもない東京駅に着き、必死で後ろから降りようと押してくる誰かの力なのかよくわからないまま、スロープへ流されていく。
引力ってものがあるのは小学校で習ったし、恋人同士が引かれあうのも感じたこともあるけれど、会社と人にも引力があるって誰も教えてくれなかったな。２年前まで僕が見過ごしていたネクタイは、それはそれは頑丈に絡みつく首輪みたいなものだったなんて、僕は知る由も知りたくもなかった。

こうやって、そう思って毎日が過ぎ去っていく。ＡＭ８：３０どこにでもいる若いサラリーマンは今宵、幻と出会うと知らないまま、街の雑踏の中へいつものように溶けていった。

「凛ちゃーん、いつも通りブラックで！」
「はーいって山本さん、今日は早いですね？」
凛と呼ばれた女子大生風の女の子は慣れた手つきでコーヒーを注ぎながら、常連客に言葉を返す。
「輝がいない時間にこねぇとさ一番うまいのは飲めないからな。凛ちゃんいつのまにか輝よりコーヒー淹れるのうまくなってるしさ。お世辞じゃないぞ」
山本は出されたコーヒーを一口飲み、煙草に火をつけながら笑いながら答えた。
「まぁーねぇーなんだかんだでもう三年になりますからねぇー、輝

さんはねぇーこの店本気で自分の店って自覚あんのかなぁ」
凛はカウンターに両手で頬杖つきながらため息交じりに答える。しかし自分の腕を褒められたのはうれしいらしく、気づいたようにタルトをワンピース、山本に「サービスです」と差し出した。
「ありがとさん。褒めてみるもんだな。まっこういう気遣いも入れて昼間の輝に勝ち目はねぇな。そんで今日輝は？いつもの『探しもの』か？」
「ならいいですけど多分今日はパチンコだと思いますよ。レジから３万円持ってきましたから。」とまた溜息をつく凛。

ギギっと古びた扉が開く音がして、山本と凛が振り返るとそこにはこの店の主人、２０代後半の男には不釣り合いな大きなぬいぐるみを抱えた輝が不釣り合いなふてくされた顔で立っていた。
「・・・お前ら俺がいなけりゃこういう会話してるのか。あー凛、今日の勝ち分お前の大好きなミニーのでっかいのにかえてきてやったのになー。？これを山本さんちの京子ちゃんにあげて凛の時給を８００円にする。？俺の部屋のミッキーに恋人をプレゼントにして凛の時給を８００円にする。さぁ好きな方を選べ」
「？　で！」
「どっちも私時給８００円だしミニーちゃん貰えないじゃないですか。いいですよ近所の和民が１０００円ですからそっちに移りますよ？」
山本が笑いながら即答すると同時に間髪入れずに凛がツッコむ。
「冗談だよ冗談持って帰るまで今日はその辺飾っとけ」
輝が凛に向かってぬいぐるみも放る。
「飾っとけってこの店にもうあんまりスペースないんですけど、輝さんの『探しもの』のせいで」狭い店内を見渡しながら凛が嘆く。
「『探し物』といや、この前の折れたラケットの主がまだこねぇな。そろそろ頃合いだと思うんだが・・・」
輝はカウンターに入りながらそう呟く。仕事場につく彼の姿は１７

０半ばの身長で標準的な体格少し生やした顎髭も、若くしてこの店のマスターをしていると言われれば思ったよりもしっくりくる風貌だ。
ここは日比谷復刻堂・・・現在と未来、そして過去の交差点。幻の交差点。この昼は喫茶店、夜はバーのありふれた小さく古ぼけた店。ほかと少し違うのは主人の輝には人の『探しもの』からその人を惹きつけ、夢や幻を見せる不思議な力があることだけ。ある客は笑い、またある客は泣き、あるものは覚悟を決めてこの店の扉を２回潜っていく。
今宵もまた来客があるようだ・・・。

ep. 01　25歳のスタンド・バイ・ミー（後書き）

導入なんで展開はまだまだです。

ep. 01　25歳のスタンド・バイ・ミー　02

「・・・ということで今月は営業強化月間にするので皆さん頑張りましょう！」

営業企画部のやつらが新しく発注した社業案内を意気揚々と長ったらしい説明をしたところで、時間が押していたのか総務部長が簡単に締め朝礼が終わった。

実際はそんなものができたところで法人営業中心のこっちとしてはあんまり変わらないのだけれどもね。まぁ前ダメだったところにでも連絡を取ってみましょうかくらいにしか思えない強化月間宣言。

まぁ入社3年目の俺がこんな心持になるくらいだからサービス業の営業って売れないの前提で進んでくしかないんでしょう。

そんなことを思いながら席に戻ろうとしていたら、携帯が震えた。左ポケットなんで会社用じゃない方だな。多分電車が遅れた時にくるヤツだ。普通の社会人になったヤツがほとんどだし、こんな時間に連絡してくる友人はいない。

そんなことを考えながら俺は自席に戻って本日の予定をリマインドしておく。今日は得意先へルートして回る予定なので比較的気持ちは楽だが、昨今の景気の悪さが影響してか世間話で終わることが少なくない。まぁさっさと息詰まる会社を出て、サクッと回って気晴らしにコーヒーでも飲もう、とやる気のない日モードで行くと早々に決め込んで雫は外出の支度を整え始める。こういう時の決断力や行動力は気合いが入っている日とは大違いだなどとどうでもいい事をふと考えながらも上司に「じゃっ営業行ってきます」といつもの言葉を投げかけ、会社の外へ足早に飛び出していった。

「・・・最近はこれぞエースってピッチャーも減ってますよね」
「そうですね。少し結果を残すとなにかとメジャーだ世界だなんて華々しく行ってしまってチームの顔になれる選手が少ないですものね」

・・・参った本当に世間話だ。少しは棚ボタな話ぐらいはと淡い期待をかけていたが、結局、暇を持て余してるのは先方も同じだった様で、「お互い景気がよくないですね。また何かお仕事ありましたら氷室までご連絡くださいね」と愛想笑いで締めて、3社目の営業を終えたところで携帯がまた震えた。
携帯を見ると大学時代の友人の水上から電話とメールがそれぞれ1件づつ入っていた。メールには共通の友人、霧沢について衝撃的な文章が書かれていた。

「霧沢が山で行方不明になってるらしい。
とにかく今日時間作れるか？」

携帯を持つ手にも心の震えが伝わる程、氷上は衝撃を受けていた。
なんで？どうして霧沢が？
落ち着け、落ち着け悪い冗談かもしれない。本当に悪い冗談かもしれない。水上に電話口で怒って終わればいい。

とにかく水上に電話をかける。

「ただいま電話に出ることができません。ピーッという発信音のあ・・・」

ちくしょうあいつも仕事中かよ。

「本当なのか？時間は取るから連絡くれ。」

と水上にメールを打ち、すぐさま会社に電話をかけた。

「すいません今日は直帰させて頂いていいですか？少し気分が悪くなってしまいまして」

「あぁどうした？暑けにやられたか？あんまり無理するなよ。」

雫の上司は穏健派で有名な課長だった。リーダーシップとは無縁の人なので、こういう突発的な休みもすぐ許してくれる。普段は頼りないが、こういう時はつくづくとなりの課の若手いじめで有名な労働至上主義の上司なくてよかったと思う。

とにかく落ち着こうとしてすぐそばにあった喫茶店らしき店に飛び込んだ。

ep. 01　25歳のスタンド・バイ・ミー　02（後書き）

別途ＳＦ書き始めたら放置状態にｏｒｚ

ep. 01　25歳のスタンド・バイ・ミー　03

「いらっしゃいませ～。一名様でいらっしゃいますか？こちら席へそうぞ」

先程まで馬鹿な会話で輝と山田と一緒に騒いでいた凛が今入ってきたサラリーマン風の男性に声をかけ接客を始めた。
入ってきた男性は「コーヒーで」と凛に告げたあと上の空でタバコに火をつけた。

「そろそろお客さん増え始める頃かね？俺は御暇しましょうか」

山田がそういって五百円玉を輝に渡す。

「まぁそういう時間帯もあるけどさ。もう一方の客だからな。」

受け取った五百円玉をレジにしまいながら輝が山田に小声で耳打ちする。

「ん～ってことはあれか？また俺の時みたいなの彼は体験するってか？」

山田は自分がこの店に初めてきた時のことを思い出しながら目を丸くする。

「あぁだけどいつもと少し違うらしい。俺が見せるのは彼じゃないっていうか感覚的には彼にも何かを見せる必要はあるんだが、どうも何かひっかかってるみたいだ。少し話を聞いてみるさ」

「ふ～んそういうのもあるのかい。つくづく変な超能力だな輝の力」

「山田さんみたいにもう誰がどうみてもダメだみたいな感じで入ってきたのは、ほとんどいないって。超能力って言われるとかっこいいけどさ胸から火が出せるとか空が飛べるとかロケットパンチとか、そういう能力であって欲しかったよ。」

「そんな超合金ロボのような力なんにもならんだろ。まぁいいや少し話を切り出させてやるよ」

そういうと山田は入口付近に座った男性とコーヒーを配膳している凛の近くへ寄っていった。

「凛ちゃんまた今度ね。しかし兄ちゃん浮かない顔してんな。ここのマスターは聞き上手だし、いろんなこと解決してくれるから相談してみな。じゃあの」

「ありがとうございます。わかっちゃうもんですね」

と男性はそつなく山田の言葉に返事をする。

凛は輝と山田の会話を聞いてなかったので、山田の言葉に少し驚き、ちらりと輝の方を見る。輝はそれを受けて凛にこっちこいと手で合図を送る。

「輝さんあの人なんですか？さっき言ってたラケットの人って？」

「あぁ違うと思うんだが、少し関係ありみたいなんで名前聞いてきてくれるか？」

「了解！」

凛は久しぶりのもう一方の客の来店に気合をいれながら男性に話かけにいく。

25歳のスタンド・バイ・ミー04

「お客さん。なんか悩みでもあるんですか～？」

雫は声かけられて少し驚いたようにウェイトレスを見た。

どうやらさっきの常連らしき人が言っていたのはこういう風にお客に接しているアットホームな店だよという意味だったらしい。

「あぁちょっとね。昔の友達が少し事件に巻き込まれてるみたいで今報告を待ってるんですよ」

雫は自分の口からこんな言葉が出るくらい動転している自分に少し驚いた。冗談であって欲しいと思っているのは理性のほんの一部分だけで、本当は水上の返事を待っても今自分の発した言葉が現実になってしまうんだろうと理性のほとんどが認めてしまっているらしい。

「大変じゃないですか？失礼ですけどどんな方なんですか？」

あまり話すべき内容ではないが、今は誰か話相手がいた方が気が楽だなと想い当たり障りのないところで少し話して気分転換しておくのもいいかもしれないと思い直し、

「あぁ学生の時の友達で霧沢っていうんだけど、俺達は大学で一緒のテニスサークルやってたんだ。霧沢ってヤツは高校時代ワンダーフォーゲル部っていうのかな？確か。そういうところにいたヤツだから登山が好きで、一生かけても百名山を制覇するんだって息巻いてたよ。まぁ大学からテニス始めたからあんまりテニスはうまくな

かったけどね」

「へぇなんかかっこいい人だなぁ。私高校の時からこの店でバイトしてるし、大学のサークルにも一応入ってるんですよ。えーと・・・お名前まだ聞いてませんでしたよね？私、凛っていいます。あそこでお皿吹いてるのがマスターの輝さんって言います。」

「氷室、みんなからは下の名前の雫って呼ばれてるから雫でいいよ。」

「雫さんですか。そうそう私のサークルのお話、実はテニスなんですよね。うちにはあんまりそういう変わった趣味持ってる人いなくて退屈しちゃってるんですよ。このお店にくる人の方が面白くて。」

「へぇそうなんだ。うちのサークルは変わったヤツが多くて困ってたよ。自分も含まれてるらしいんだけどね。さっき言った霧沢と水上ってヤツがいてさ。ほら水上が水で、俺が氷で霧沢が霧ってみんな水の名前が入ってるからそれがきっかけで仲良くなっちゃってさ。俺と水上はよく山に連れてかれたよ。ハイキングって騙されて、２０００m級の山に連れてかれたこともあったなぁ。」

雫は学生時代の事を想い出しながら話していた。同時に過去の記憶に少し饒舌過ぎる自分が何か悪い知らせを呼びそうで凛の話に話題を変えようと思い、

「そうそう凛ちゃん・・・だっけ？大学生はもっと大学で楽しめること見つけた方がいいよ。ところでさっき言ってたけどこのお店のお客さんって面白いの？」

「えぇとっても。さっきの山田さんは小さい会社の社長さんだし。

他にも有名バンドのヴォーカルとかお忍びで来たりしてますし。そういう人はみんなマスターのおかげで色々うまくいった人が多いんですよ。実はここだけの話マスターが超能力者なんです」

さすがにこれは雫の想像の範疇を超えた話だった。おいおいカルト宗教が運営してる店なのかここは。だとしたら適当に店変えないとと思いながらも言葉に詰まったままでいると

「あっ今カルト宗教かなんかだと思ったでしょ？そんなんじゃなくてなんていうか自分の過去や未来と向き合わしてくれるのがうまいってだけですから。」

「あぁそういうことか。超能力っていうか聞き上手で話上手な人なんだね。」

なんだお客さんの関係を築くのがうまいってことか。確かにそれも一種の天賦の才かもしれないし、まだ大学に入りたての子から見れば超能力って感覚もわかる気がする。
確かに流行りのチェーン店とは違って使い込まれたように変色している木を基調としたアットホームな雰囲気の内装だし、そういう空間作りもうまいんだろう。

「あんまり人のことを人外扱いしないでくれる？」

先程名前を聞いた輝というマスターが会話に入ってきた。今の所は他の席で談笑している女子大生風の人達しかいないから彼女らにコーヒーを出し終わり少し暇になったのだろう。

「まぁまぁ輝さん。超能力者ヒカルかっこいいじゃないですか」

凛が笑いながら応える。

「輝さんって慕われてらっしゃるんですね。僕と大して年変わらないのにすごいですね。」

「そんなことないですよ。あっ勿論後で超能力はお見せしますから。今水上くん待ってるんだろ？その水上君ってのもこっちに呼んだら？一応夜はバーにしてるから二人にぴったりのカクテル準備するよ」

輝が笑いながら冗談めかして応える。

「そうですね。コーヒーよりはそちらの方がいいかもしれないですし」

そういいかけた時、雫の左ポケットが震えた。

ｅｐ０１２５才のスタンド・バイ・ミー０５

水上からだった。

電話を取る手だけでなく全身がくまなく緊張していくのがわかる。心臓の音も聞こえなくくらいに。

「もしもし」

「悪い雫。連絡が遅くなっちまって。今まだ会社か？」

「こっちも悪いコールバックが遅くなっちまって。今日比谷のえーと・・・。」

「復刻堂です。」

店の名前を確認していなかった雫に察した輝がすかさず自分の店に名前を教える。

「日比谷の復刻堂っていう店にいるんだ。お前の会社有楽町だろ？すぐこれるか？」

「あぁ大丈夫だ。朝のメールの話になるけど覚悟だけはしといてくれよ。」

そういって水上からの電話は途切れた。

「輝さん。込み入った話になるかもしれません。少し長居してもいいですか？」

ふいに出た言葉で、もしかしたら少し気が動転しているのかもしれないが、なぜかここで話をすべきな気がして雫は輝に問いかけた。

「あぁ勿論。大体の話はわかったから。それに二人に渡さなきゃならない物もあるからな。」

「ありがとうございます。」

雫は輝の最期の言葉にわずかな違和感を感じたが、それ以上に何か真実めいた物がここにあるような気がしていた。

「あの・・・コーヒー・・・もう一杯もらえますか？」

「あっ・・・はい。」

凛がバタバタと音を立てながら厨房へ入っていった。

ep01　25歳のスタンド・バイ・ミー　06　07

やっぱりあの人なんじゃん。慣れたこととは言っても最近はいい思い出関係ばかりだったからあんまり気乗りがしないなぁ。
凛はそう思いながら雫が頼んだコーヒーを入れて、すぐに雫の席に戻った。

「お待たせしました。私にはよくわからないけど少し落ち着くように濃いめにしときました。水上さんが来るまでですが、言いたいことがあったらいくらでもお話お聞きします。」

「ありがとう凛ちゃん。でも話はまだ俺にも分からないからさ。うんありがとう。」

そういって雫はコーヒーに口をつけた。

少し熱いな。と思いながらも食道に入っていく時の刺激と胃に落ちた時の温かさが雫の心を落ち着かせてくれた。

そしてガチャンという音と共に、雫が今一番待っていた人が扉を開けて入ってきた。

「雫」

水上がすぐに雫に気がついて同じテーブルに着く。

「なぁやっぱり・・・」

雫がうまく切り出せずにいると

「あぁ嘘じゃねぇ・・・」

水上の言葉はきっぱりと雫の手にしていた細い糸のような希望を切り裂いていった。

同時に水上自身も今発した自分の言葉で雫と同じように心にあったものが途切れたのだろう。それから二人は少しの間、一言も発することはできなかった。

「あの・・・ご注文宜しいですか？」

二人が押し黙ってしまっている中に凛が遠慮したような声で話しかけてきた。

「あ、あぁ凛ちゃんごめんね。おい水上とりあえず何か飲もう。な？」

雫は静寂を破ってくれた凛の言葉に少し安堵し、感謝していた。おそらく水上もこのままでは次の言葉が見つからないだろうから。

「あぁ。じゃあウィスキーロックで貰えますか？雫もそれでいいか？」

無言で雫がうなずき、時計をちらりと見ると夕方の5時を少し過ぎた時間だった。先程まで喫茶店だったが、夜はバーにしていると主人が言ってたっけと、今はどうでもいいことに頭が回る。

「俺さ。何回か霧沢のお母さんに会ったことあるんだけどもさ。その時知ったんだけどうちの親と大学時代一緒に授業受けた中なんだって。だからさ俺の親と霧沢の親同士が仲良くなってて、それで、今回のこともすぐ俺に連絡がきてさ。」

水上もまだ少しショックから抜け出せていないようで、事の顛末をできる限り詳細に順序立てて話そうとしているが、言葉が浮ついている様子だった。

「落ち着こう。それで霧沢のヤツ今どうなってるんだ？」

雫の方がとにかく水上がうまく話せるように、何よりも知りたいことを端的に聞いた。

「すまん。昨日からあいつ谷川岳に一人で行ってたらしいんだ。入山記録も残ってる。
野営はするつもりがなかったみたいで麓に宿は取ってたんだけど。
結局宿には連絡もなくて、他にも全く連絡がないんだ。」

「本当に行方不明になってるってことか。」

雫がなんとか冷静さを保ちながら、水上が言えなかった言葉を代弁する。
無言で頷いた水上が少し間を置きながら顔をあげた。

「俺あいつに何度も助けられてんだぜ。サークル辞めそうになった時も就活中もさ。あいつとお前がいたから頑張れたことだって沢山あるんだ。なのにこんなこと悪い冗談で済ませたいよ。」

分かってる。そんなことは分かってる。感情的になってしまった水上を見ながら、雫は自分も今言葉を出せば水上と同じことしか言えない。

また無言になってしまった二人の静寂に

「お待たせしました。」

と凛が頼んでいたウィスキーを2つ雫と水上の前にそれぞれ置く。

先程と違い雫すら次の言葉が見つからないだけではなく、凛にありがとうの一言もかける余裕がなかった。

ＥＰ０１　２５歳のスタンド・バイ・ミー０８

「なるほどね」

輝は二人の様子を見ていたが自分の客がこの二人ではないということに気づいた。先程までの違和感の正体はこの二人が求めているものを見せるのではない。
そう多分この壊れたラケットを輝に巡り合わせてのは他でもない彼らが話している霧沢本人だったらしい。

「凛。こっちこい」

凛は他の常連に声をかけられ接客していたが、輝が呼ぶ声に反応して厨房へと戻ってきた。

「マスター、なんですか？それより今、矢野さんとこに子猫が生まれたって話なんですけど何かサービスお願いできます？」

「あぁそれはおめでたいことだな。矢野ちゃん！おめでとう！今日はいいベーコン仕入れてるんで軽く炙って俺からのお祝いの品にしときますよ！凛これ洗っといて話はそのあと」

はーいと凛が野菜を洗い始める。

輝は店長らしくてきぱきとお祝いの言葉とサービスの厚く切ったベーコンを炙り、皿に盛り付ける。

「すんません。凛も手が離せないんで、取りに来てくれます！？」

「了解って仕方ないわね。人手が足りないなら雇ったらいいじゃない。」

「勘弁してくれよ。こいつの給料だって一杯一杯なんだぜ。」

輝が凛を指差しながら応える。

「はいはいじゃ頂くわ。ありがと」

常連の矢野と呼ばれた女性はベーコンを自分の席まで持っていった。

「マスター、呼んだってことはあの二人にいつものやるんですか？」

呼ばれてから放置だった凛がふてくされ気味に問いかける。

「あぁことによっては久しぶりに遠出になるから来たいなら3日くらいあけとけよ。」

「えぇそんな複雑なんですか？あの二人にその多分、霧沢って人の思い出見せて終わるんじゃないってことですか？」

凛は驚きながらも雫と水上に聞こえないように小さな声で囁く。

「あぁもう一人大事なヤツがいるんでな。キッチン任せる」

そう呟くと輝は先程矢野に出したベーコンの残りを、というより最初から2皿分作っていたもののひと皿と折れたラケットを手に雫と水上の方へ歩いていった。

「少し込み入ってらっしゃるようなのでどうぞ。」

手にした皿を二人の中央に置きながら続ける。

「すいません。少し聞き耳を立ててしまいました。ご友人のことですがこいつに見覚えはございませんかね？」

雫と水上は一瞬目を丸くする。すっと差し出された物は昔霧沢が使っていたラケットと同じモデルのものだったからだ。

eP01　25歳のスタンド・バイ・ミー09

雫は当然だが何故こんなものを輝が持っているのかが全く理解出来なかった。先程から思い返せば超能力者だ俺達に見せなきゃならない者があるからとか変なことばかりだ。一体この男はなんなんだろう？チラリと横を見るが、水上の方はあっけにとられたまま絶句している。俺以上に水上に取っては意味が分からない状態なのだろう。雫がとにかくこの乙男の手に握られている霧沢のものかも分からないラケットについて言葉を選びながら質問する。

「輝さん。これって霧沢の・・・。」

なんとか雫が発した言葉であったが、ここから先が全く続かない。なにがなんだか分からない。俺は何を言っているのかわからない。こんな所にアイツのラケットがあるという事実を俺はまだ咀嚼しきれていない。

そんな雫の様子を見て輝が話を続ける。

「雫さん水上さん。これは正真正銘霧沢さんの使っていたものです。なんでかね私には不思議な力があってこういうお客さんに取ってなくしてしまったものが手に入るんですよ。・・・一度目を瞑っちゃいただけませんか？本当は霧沢さんにお渡ししなけりゃいけないものなんですが、あなたたちに少しお見せします。彼の姿を。」

そういわれても雫と水上は彼の言動に一片の理解すらできず、固まったままだった。しかし雫がまた言葉を捻り出す。

「あの俺、その輝さんの言う意味が多分全然意味がわかってません。輝さん本当に不思議な力があるってことなんですか？それならすぐ

に目を瞑りますから宜しくお願いします。」

水上へ目配せして雫は瞼を閉じる。

二人が目を閉じたのを確認して輝は集中してゆっくりと折れたラケットに手を置く。

ＥＰ０１　２５歳のスタンド・バイ・ミー１０

閉じた瞼の暗闇から光が差し込み雫は見知らぬ景色の中にいた。寒い。最初に身体が感じたのはそれだった。次に右足に激しい痛みが走った。全く力が入らない折れてるのか。ふと自分の足を見ると先程までスーツ姿だった自分が登山用のカーゴパンツになっていた。しかしそれも縦に大きな裂け目が出来裂けた所は血なのだろう黒く汚れてしまっていた。

「畜生死にたくねぇよ」

自分の言葉ではなかった。が自分の口からそんな言葉が漏れた。そして自分の心ではないが、日が昇れば誰か助けがくる。そんな希望が湧いてきたのか手にしていたリュックバックからスポーツタオルを傷口にあてて少しでも出血を抑えようとした。そして今まで感覚だけ共有していた身体がようやく自分の意思で動くようになり、雫は周囲を見渡すことができた。深い闇で全く何も見えない。聞こえるのは強い山風が自分の横たわっている斜面を駆け下りていく時に身体を震わす木々の無限の交差するざわめきだけだった。その声に惑わされるように心が一気に冷えてゆく。もたげてはならない死への恐怖が身体を包み、身震いをする。死への恐怖が明快に心をつかんだ時、やっと感触の戻った身体と暗闇に慣れ始めた目は周囲には落ち葉や枯れたきの枝の量が大凡人間が切り開いた山道と比べることができない程溢れていることに気づく。どこだここは？まさか霧沢の・・・だとしたらこれは今の霧沢の姿なのか？それとも夕べの姿なのか？錯乱した頭が最も重要なことを思索し始めた。今ありのまま霧沢がこんな状態なのであればアイツを救える？まだ間に合う？行かなきゃ俺は行かなきゃ。霧沢の所へ。すると雫の見つめる先からまた光が差し込んできた。雫ははっとな

って周囲を見渡す。そこは先程までの暗い山中でなく、目を閉じるまでいた復刻堂の室内だった。

水上もおそらく俺と一緒の状態なのだろう。輝を大きく開いた目を向けている。

「輝さん。今のって・・・」

雫はこの状況を正確に把握出来ていない。さっき凛の言ってた超能力ってことなのか？

「えぇ世間一般では超能力ということになりますが、私が二人にお見せできるのはここまでです。どうでしたか？」

本当にこんな力が存在するなんてという驚きと同時に雫は期待が先行した。この人がもしかしたら何かもっと不思議な力の持ち主でもしかしたら霧沢を救ってくれるのかもしれない。

「今の霧沢の現状なんですか？本当に？」

水上が雫より先に輝に言葉を投げかけた。

「えぇ多分。確証はないですが、私の力では今引き出したものが彼の今だと感じます。本来はあなたたちはこのラケットが見せるビジョンの対象ではないのでこれ以上はなんとも」

輝の答えは水上と雫が期待した様なものではなかった。それでもそうであったとしても輝のこの力が今の不安と希望が曖昧に混ざり合って途方にくれている自分達にとって、そして今間違いなく生きている霧沢の生命にとって間違いなく何か果たしてくれるものがある

のではないか。そう思っているのは雫自身だけでなく、水上も同じだろう。

「だとしても霧沢の事を少しでも助けてやってください。俺達明日から現場に行きます。絶対にあいつは生きてます。そう最後まで信じさせてください。」

「わかっています。私も一緒に行きますよ。私だってただ貴方達にこれだけ見せて終わりだなんて白状な人間ではありませんから。」

そういいながら輝は二人の目を交互に深く見つめた。
雫と水上どちらもが視線を外さずうなづく。

「矢野ちゃん！ごめんな。今日は終いにするわ。えーと猫の誕生ケーキ来週作るからさ。勘弁な！凛！片付けと準備頼む。俺は車回してくる。」

輝が大きめの声で常連客に閉店の旨を伝え、凛に支持を出す。
矢野と呼ばれた女性がそれに慣れっこのような顔をしながら溜息混じりに応える。

「はいはい行っといで。今日の分は来週に上乗せしといてくれる？」
「了解了解。サービスしといたらぁ」

先程までの紳士さとは違い、常連客にだけ見せる特有の砕けた会話を交わした後、輝が雫達にここで待っててくださいと言って店の外に駆け出して行く。
雫は急に動き出した時間の流れにわずかな希望を感じながら、全く反対のこのまま停滞した時のままであれば霧沢は死ぬことは絶対な

い。だけど今俺達が飛び出せばこの時間が進んでしまうのではないか？そんな相反する不安を抱いていた。

ep01－11

車の少ない車道は静寂の力を借りて人を惑わせる。この道程に何か人ならざるものがいるかのように。普段ならば迷信めいた不安で夢幻を見ることもあるだろう。
ただし今宵の不安は已に希望と混じりながら全身を穿ち、道程の恐怖や畏怖するものとは質の異なり、静寂はただ雫の中へ簡単に染み込んできた。

「輝さん」

車が高速に乗ったあたりで雫が静寂を切る。

「どうしました？」
輝が問い返す。

「いや・・・その・・・何でここまで手伝って頂けるんですか？」
正直な話理由などどうでもよい。ただこの人が付いてきてくれただけで、横で眠っている水上も雫自身も幾拍かの心の余裕が保てているのだから。

「たまにあるんですよ。探してきたものの持ち主が来ないことが。そういう時は届けにいくんです。大丈夫ですよ。結局亡くなって来れなかった人はいませんでしたから」

「そうですか。ありがとうございます。」

雫が最も心配していた事を見抜いたように言葉を選んで付けたして

くれた輝に素直に感謝の意が口から溢れた。大丈夫霧沢は生きている。そう信じさせてくれる人がここにいる。それだけでも溢れそうな心の中は辛うじて安定を得られる。

「それにしても友達というのはいいものですね。皆さんを見てるとそう思います。私はあんまりいませんでしたから」

「意外ですね。輝さんは人柄も人付き合いもいいですし、常連さんも多そうでしたけど。」

「今はね。昔はこの力のせいにしてあんまり人と接点もてなかったんですよ。だって雫さん。勝手に相手の記憶や将来見えちゃったら、人付き合いでどうやったって普通の人よりは有利になっちゃうんです。僕もバカじゃないから、絶対にそんな素振りは見せませんけどどうしてもね。まぁ洞察力の強い人は皆そうなんだろうけどって気づいたのは学生生活も半ば過ぎてましたし」

雫はうなづくように彼の話を聞いていた。
輝は言葉を続ける。

「そうしていつのまにかあんな店を持ってこの子みたいなのが集まってきて今の僕があるんですよ」

そういって助手席で眠っている凛にハンドルを握ったまま親指を差し向ける。

「洞察力ですか。霧沢も輝さんのような力があったのかは知りませんが、洞察力の強いヤツでした。普段はおおらかなんですけどね。偶にものすごい切れ味で正論を言うんですよ。俺や水上が迷った時、スパッと。本当に親身になって話を聞くだけのやさしさじゃなくて

答えを一瞬で引き出してくれるんです。輝さんがやってくれたように。」

「私は何もやってませんよ。」

「そういうんですよね。霧沢も」

雫の中で「俺は何もやってねぇよ」という霧沢の声がダブって聞こえた。自分がつまづいた時や、悩んでいた時に酒を酌み交わし、言葉を貰い、乗り越えたあとの謝辞を言うと決まって返ってきた言葉。口癖ではないと思うが、間違いなく霧沢を表すとしたらこの言葉しかないなと思った。

それから輝と雫はお互いに会話を交わしているというよりは、静寂を嫌ってそれぞれが2、3の言葉を発しては少し黙りを繰り返す。そして先程から詰まってきた道路の状況を輝がチラリと道路表示を確認しながら、

「事故みたいですね。少し休みますか？」

霧沢の事を考えるととにかく急ぎたい気持ちもあったが、おそらくこの深夜に現場についてもど素人が何かできるとも思えないし、雫は素直に輝の提案に乗った。

「そうですね。輝さんの入れるコーヒーには敵いませんが、一杯奢ります。」

雫の了解が取れた所で、輝は途中のサービスエリアに車を回してくれた。冷静に考えれば横で寝ている水上のように少しでも休んでおくべきなことを諭してくれているのだろう。ずっと気を使って貰っ

てばかりで申し訳なく思う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9454s/

日比谷復刻堂

2011年12月23日13時50分発行